

DOJIN  
R18  
成人向け  
18歳未満の  
購入・閲覧禁止

# 忍者の愛した



# 露出狂

添牙いろは  
Soekiba Iroha  
イラスト：ターヤ



いまでこそ、

みんな気軽に写真を撮ったり

ネットに上げたりしているけれど……

私が学生の頃に

スマートフォンなんてなくて

本当に良かったと思う。

だからこれは——

若かりし頃の思い出ばなし。



私はこれから——広い世界を前にして裸になろうとしている。

それは間違いない、生まれて初めての経験となるだろう。

窓の外の険しい山々を眺めながら、私はゆっくりとシャツを捲り上げた。

短めのスカートもストンと下ろす。見せる相手が深緑の樹々なら、何を恥ずかしながら必要もない。

とはいえ、これ以上は……少なからず緊張する。丁寧に包まれていた肌を、無防備に曝け出すのは。

でも、ここまで来たのだから——私は心を決めて、背に手を回す。留める時は面倒なものだけど、外すのは簡単。締め付けはすぐに緩められ、湛えられていた胸が重みを帯びて形を変える。

何ともいえない開放感。自然な姿で、自然な揺らぎが感じられる。膨らみを撫でてゆく生暖かい空気と共に。

そしてついに、最後の一枚となった。目の前の扉が開かれた時、そこに広がるのは日常の中の非日常。私はもう、いままでの私じゃない。これまで取り繕っていた殻を破り捨て、新たな自分となるために——私はすべてを脱ぎ去った。

何ひとつ隠すことのない本当の私。ここまで導いてくれた彼には感謝している。

でも——

「わあい♪ 雛菊ひなぎくかわいいよ雛菊っ」

一步脱衣場から出た途端にコレかっ！

「騒ぐな！ ひつつくな！ もう、鬱陶しい！」

あーあー、確かに私や彼女にはなつてやつたわよ？ 恋人なんだから、裸の付き合  
いだつて承知の上だし。だけど、もう少しこう……節度を持ちなさいよ！

貸し切りの露天風呂だつて、一応公共の場なんだから。せつかく絶景を見渡せるつ  
てのに私の女体カラダばっかじゃない！

あつ、コラ、タオルを剥がすな！ 見せないとは言つてないけど……見せて平気で  
もないのよ！ 湯船に浸ける気はないから落ち着きなさい！

胸はともかく……下はやめろ！ パチンと叩き払つてやつたら……

「……………」

何よ、その無言の抗議。涙目になるほどのことなの？

はあ……こういうクセがあるのは知っていたけど……この男選びはちよつと軽率だ  
つたかも……なあって、思つたりしてしまふのだつた。

# 忍者の愛した露出狂

添牙いろは

あー……つまらん！

つまらん、つまらん、つまらん！

そりゃー私だつてソコまで夢見てたわけじゃない。最初は絶対痛いし血も出るんだろうなー、と覚悟もしていた。

でも、それを乗り越えたら……きつと気持ちよくて楽しくてドキドキして……そんな素敵な大人の男女交遊——セックス、を期待していたのに。

あんなの、全然面白くないわ！

ひとり自宅の部屋で大の字になり、私は先週の旅行に思いを馳せる。

夏休みを利用しての一泊二日——学生にしては大奮発だ。

それもこれも、彼氏のため。

なのに……なんなのよ、あの謎の気遣い！ 『大丈夫、苦しくない？』とか何とか。挿入れるモン最後まで挿入れ<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>て。だったら、その腰を動かすなー！ っつてド突いてやろうかと思つたわ。実際のところはそんな余裕もなかったけど。

……まあ、清貴<sup>きよたか</sup>も初めてだったことには違いないし？ だからこそ大目に見て、次からは私も楽しめるかな、と思つてただけだね。……全然だわ。どうしてああも腑抜けてるのかしら、あの男。前回のデートなんて、カラオケ中にサーブスしてやったのに。机の下に潜り込んで、その……ねえ？ 清貴のアレなところをアレして、モゴ



モゴ、モゴモゴって……

しかも、口だけじゃなくて、スカートの中からパンツまで抜いて、あんなところで……そのー……致して、やったのに！

堂々と膝に乗り上げて！！

……あの体勢なら、カメラに映ってても大丈夫よね……多分。

それなのに……きもちいいよひなぎくー、じゃないわよ！ 誰が頭を撫でろと言った!? あんなに深く交わってたのよ？ だったらもっとこう……燃えるような何かがあってもいいでしょ。なのに、あんなふうに労われたら、軽くあしらわれてるみたいじゃない！

男って、もっとスケベなのかと思ってた。女としてしっかり身を守らないと、ガッツリ喰らい尽くされてしまうくらいに。

だけど……そんな野性味を見せてくれたのは、露天風呂での一瞬だけ。

あの男、お風呂にアレを置いてきちゃったのかしら？

いや、ちゃんとしているのはこの身をもって知ってるけど。

そーじゃなくて……

男らしく引っ張っていく気概というか、

言葉には出さず、態度で示すというか。

はあ……付き合い始める前の、学級委員然としてた頃の方がまだマシだったわね。険しい表情で黙々と本を読んでいる姿は……まあ、悪くなかった。伊達眼鏡も結構似合ってたし。

少しだけ注文をつけるのなら……そうね、教室だと騒がしいから、静かな図書室で、とか？ 陽の落ちかけた夕暮れ時とか結構良さそう。ほんのりと紅く染まった本棚に囲まれて、書物を読み耽る清貴……か。わりと絵になるかもしれない。しばらく傍にいても気づかないくらい没頭していて欲しいわね。そして、ふとしたところで、私の気配を察して顔を上げるの。いつからそこにいた？ とか不機嫌そうに呟きながら。いつからいたかは判らないけど、きつと私は彼を見かけてもすぐには声を掛けないと思う。横顔をそつと眺めていたいから。

でも、清貴はそれ以上何も言わない。男は、余計なことは喋らないものよ。黙って席を立った彼は私のところへ淡々と歩み寄り――

「っ！」

そう、やっぱ唇を奪うくらいがちょうどいい。胸やら股間やら、下衆いところを狙い撃つようなマネはしないで。

どうしてあの男はそういう機微が解らないのかしら。舌と舌を合わせるのだって、こんなに……エロいのに。

「ん、んふう……ん……っ♡」

ものも言えず、声すら上げられず、男のコの広い肩幅に抱き竦められて……私も彼に寄りすがって、唇と唇の柔らかさを交わし合う——それがあってこそ、セックスよね。こんなにドキドキしてたら、うう……そう、欲しくなる。ちゃんと気分が盛り上がるからこそ、触れて欲しい。

人と人の、愛しさで。

自分の膨らんだところを彼に押し付け、

彼の膨らんだところを自分に押し付け、

カラダカラダカナン  
男体と女体を性感じ合っていると——

……図書室といえども、無人ではないわよね。貸出カウンターの方からとっても居た堪れない空気が流れてくる。そこに座る男のコは、じーっとガン見するわけでもなく、嫌そうに顔を背けるのでもなく。恥ずかしそうに俯いて、それでも気にせずにはいられない——そんな、羞恥と好奇心の瀬戸際で。

清貴はそれに気づいているのか、一向にやめてくれない。

清貴がやめてくれないから、私もやめることができない。

私たちがやめないから、司書のコも目が離せない。

見られてるのに……

けど、本当はもっと深くまで欲しいのに……！

……多分、止めてくれるのは、下校のチャイムだけだと思う。ここでようやく、私に我に返れそう。ここまでの恥ずかしさを全部胸に溜め込んで。

八つ当たりのように小言をぶつけるかもね。あんなところでナニ考えてるの！ とか。

でも、ふたりにで廊下に出てきた途端――

『だったら、どこでならいいんだ？』

なんて囁きながら、後ろからギョって……♡

今度こそもう、誰の目もないから……

首筋に唇が吸い付き、胸も堂々と鷲掴みにされてしまつて。

さらにはスカートを捲り、パンツの中にまで手を入れてきたり！

だけど……

「あ、はあっ……ああん……」

私だって、ずっと我慢してたから。

もっともっと、アブナイところを触ってもらいたかったのを。

ブラウスの上からブラを緩められて、ボタンをプチプチと外されたら……！！

だけど……こんなに性感カシ感じてしまう。満遍なく撫でられながらも、その先端を厭ら

しい指つきでクイクイって……

「んっ、くふうん……んん……んん……」

パンツの中が濡れてきているのが自分でも判る。

清貴の指でヌルヌルと掻き回されていることでも。

だから……こうして……

学校の廊下だっことは解っているけど。

でも……今すぐシたい！

清貴の手によってスルスルと下ろされたら、緊張で私の身体は前に倒れそうになる。壁にもたれかかって何とか姿勢を保つけど……これじゃ、お尻を突き出して誘って

いるみたい！

それで勘違いした清貴は、ズボンから勃起おきおくなくなったアソコを取り出して……

学校なのに。

放課後とはいえ、まだ誰かが残っているかもしれないのに。

下校中の生徒と鉢合ってしまうかも。

けど……きつと……誰も来ない！

誰も……見ないでえ……っ！！

「あっ、はあ……っ、あああああ♥」

清貴のスラックスが、私のお尻にグニユリグニユリと打ちつけられる。

だけど、そこから真っ直ぐに伸びたところは、私の膣内なかを抉り取るように……！

「んんっ、んんっ、はっ、ああっ……」

服の前はすっかり肌蹴て、おっぱいはムニムニと弄もてあそばれてる。

外から中から、私の身体はすべて支配されてしまった。

こんなとこ、誰かに見られたらすっごく恥ずかしい。

誰も、いないわよね？

例えば……さっきの司書のコとか！

「んあっ!? はああああ!!」

ダメダメダメ！ 窓に映った扉の隙間……あれは絶対見られてる！

シャツの裾だって完全にヒラヒラしてるし！

というか、男のコが女子のお尻で腰をパコパコ振ってるし！

キスどころじゃない。

男と女で愛し合ってる……全部見られちゃってる！

なのに……

『ほら、後ろのヤツにもお前の声を聴かせてやれよ』

そんな酷いことを言いながら、口元に指を差し出してくるなんて！

思わずそれを啞えようと唇を開いたら……もう止められない！

「やあんっ！ らめえっ、見ちゃらめえええっ！」

私も、清貴も、判った上で。

後ろのあの口も、こちらが気づいているのを判った上で。

「らめっ、らっ、ら……あああああ♥」

無理っ！ 無理……止めてくれなんて絶対言えない！

だって……こんなに激しいんだもの！

ここで止められたら……もう、自分でもどうしていいか解らなくなる！

『雛菊……膣内……射精すぞ……っ！』

「いやっ！ 膣内で射精されたら……赤ちゃん妊娠ちゃう！」

でも、変なところで膣外に抜かないで欲しい。

ギリギリまで私の膣内にいて欲しい。

でも、それで間に合わなかったら……

『俺の子を孕め……雛菊！』

「らっ、ら……あああああああ♥♥♥」

ビクンッ！

ピクン、ピクン……ピクン……

「……はあ」

と、一頻り絶頂<sup>イッ</sup>といてアレだけど、清貴は『俺』なんて言わない。

そのくらい力強さはあっていいかもしれないけど。

……いや、あのヘタレ清貴に『俺』とか自称されても……『僕』の方がお似合いか。あーあ。彼氏がいるのに、妄想彼氏でオナニーなんて間抜けにも程がある。我ながらすっかり冷めきったところで……手、洗ってこよ。パンツを穿くのは、その後で。

母さんは今日も弟のところに出掛けているので、家には私しかない。だから、下着もなしにTシャツ一枚——お尻丸出しで洗面所まで来てしまった。女子として、我ながら墮落しきっているような気がする。

バシャバシャとついでに顔も洗って……じつと鏡を見てみた。ひらひらと心許ないシャツの裾は、下の毛をまったく隠せていない。むしろ、あえてチラつかせているようでもある。それすらも徐ろに捲り上げていくと……ブラは、家では着けてないので、中から覗くのはいわゆる下乳。続いて乳首。

そのまま頭を通して……全裸。まあ、ここで脱ぐ分には特に身構える必要もない。



ただ——恋人のことを考えながらとなると話は別。自分の裸身が異様に厭らしい気がしてくる。

異性を欲情させる、淫らな女体。<sup>カラダ</sup>……ハア、そんなつもりはないのだけれど。

男のそういうところは、やっぱり理解し難い。

だけど——

結局、それしかないんでしようね。

\*\*\*

私は、彼のすべてを知った上で、こうして付き合い始めている。

あの委員長ヅラは作りだつてことも、救い難い悪癖を持つてゐるつてことも。

ただ——そのお陰で、私も肩肘張らずに接することができて、つい仲良くなつてしまった。甘えてしまった、といつてもいい。どんな毒を吐いても受け入れてもらえる……と。何しろ、相手はとんでもない変態男なのだ。そんな非常識な相手に気を遣う方がバカバカしい。

それで、いつでも、事あるごとに、ついついアレコレと頼つてしまった。その結果……気づけば、周囲からは事実上のカップル認定。

だったらいっそのこと……！　って付き合い始めて、いまに至る。

だから、このくらいはやってやれないこともない。フィルムだって安くはないしね。自分じゃ上手く撮れないでしょうし。

だからといって——！

「ね、ね、雛菊っ、あそこに登ってみていいかな!？」

どうしてそう目立つようなことをしたがるの。

「自重しなさい。自転車が来るわよ」

何が見えているわけではない。こんなものは、ただの勘。

だけど……

「わっ、ホントだ。さすが雛菊ー♪」

警告したんだから隠れときなさいよ。外の通りからならここまではよく見えないだろうと気が緩んでるのかしら。

にしても……：我ながら、どうしたものかしらね。車と違ってエンジン音すらないのに、無灯火の自転車が公園の前を走り抜けていくのをピタリと当ててしまった。

どうやら私は、そのテの勘が他人ひとより鋭いらしい。周囲の動く気配を、誰よりも早く察知してしまう。とはいえ、完全である保証なんてどこにもない。

なのに……：アイツは少なからず油断しすぎている。

まったく、子供みたいな無邪気な顔して。

子供みたくに広場ではしゃいで。

危機が去ったと判るや否や、一番乗り！　と言いたげに、小高い遊具の鉄枠のてっぺんでバンザイしている。

……全裸で。

ハア……やっぱり慣れないわね、コレには。

もちろん、彼氏の裸自体は見慣れてるんだけど。

深夜とはいえ、こんな子供たちが遊びに来るような場所で素っ裸、というのは、違和感が半端ない。

最初は芸術の一環ー、みたいに納得しようとしていたけれど、いまでは――

「ほらほら！　凄い？　凄い!!」

……わかったから。そんなに見せつけなくてもいいから。何で男って、わざわざ汚いところを開かしたがるのかしらね。誰も喜ばないのに。アホじゃないかしら。

呆れながらも約束は約束である。私は、清貴に向けてカメラを構えた。

もちろん、こんな写真は現像に出せないから――男子が持つてるのは初めて見たわ、こんなインスタントカメラなんて。

バーンと間抜けに両足を広げたその真ん中に、ニョキニョキとグロテスクなバケモ

ノをそそり立たせている。辺りに人もいないようだし、容赦なくフラッシュを炊かせてもらいましょ。シャツター音も響かせて。これで、少しは萎縮して欲しいのだけど……どこまでも信頼されてしまっているのが、逆に小憎たらしい。

瞬く光と音を浴びると、清貴はその頂上から軽やかに飛び降りた。意外と運動神経いいのよねえ……体育の授業で苦労したって話も聞かないし。

着地した全裸男はこちらへと駆け寄ると、写真が現像されるまでの数十秒、私の手をじーっと覗き込んでいる。無防備に屹立する彼に対して、アソコが視界に入らないよう、さり気なく黒い紙切れで遮ってみたり。

そんな抵抗も虚しく……浮き上がってくる彼氏の局部。

「うんっ、雛菊、撮るの上手くなつたよね〜」

「……こんなん褒められても嬉しくないわ」

ずっと、デートの度にカメラを持たされてたものねえ……。その時はまだ、着衣だったけど。でも、絶対いつかは全裸を撮らされるんだろうな、とわかつてはいた。

なので——こうして遅くまでライブを楽しんだ後の深夜に、不穏な撮影会を期待されたところで、別段驚くには値しない。この後は朝までカラオケに付き合わせるのだから、交換条件のようなものだ。

一方、私自身がこのような露出行為に及ぶ趣味がないのも、清貴は重々承知してい

る。だから、どんなに発情しても、その場で求めてくることはない。

「次は、さつき自販機が立ってた駐車場に行ってみたいんだけど……大丈夫そう？」  
もちろん、そのままの格好で、ってことでしょうね。疑問形にはなっているけど、決定事項だと顔に書いてある。服をここに置きっぱなしにしたまま、徒歩数分の道のりを行く気ね。

束の間の全裸散歩を楽しむ清貴は……ちよつとだけ別の顔を見せてくれる。興奮を隠しきれないギラついたオスの顔。

本能を漲らせて、隙あらば私にベタバタとくつつきたがっているのも丸わかりでも。

カラオケボックスに入る頃には、すっかり鎮火してしまふ。

その炎を、建物の中まで燃やし続けることができない。

だから、私は可燃材料を用意した。

もし、これでも足りないのならもう諦めよう。

きつと、性癖カラダの相性は悪かったのだ。

でも、清貴と過ごすのは楽しいし……むしろ、男と女としての時間以外の方が圧倒的に長い。

恋愛関係の一部を切り捨てる覚悟で——私は開いた襟口に手を掛ける。

「ところで……もうすぐ貴方、誕生日だったわよね」  
中の下着は、さつきトイレでこっそり脱いできた。

下だけでなく、上までも。

だから……

「……………っ!!」

フ、驚いてる驚いてる。

気づかれないよう、夏だというのに少し厚手のワンピースを着て来た甲斐があったわね。

「これは、その……プ……プレゼント、よ!」

一緒に写真に入るのはキツイけど、短い移動時間をこの姿で共にするだけなら……私なら、できる。これまで気配察知を外したことのない私なら。

ここまでさせておいて、またいつもみたいなヌルい愛撫なんて認めないわよ。例え室内でも抑えきれないような厭らしい欲望を抱えさせてやる。

それこそ、清貴の方から早くカラオケに行きたい、と懇願させるほどの。

ドリンクを持って店員さんが入ってきてても解かれることのない、きつく熱い抱擁を!

そんな決意を胸に、足下に落としていた視線を上げると――

「!?」

清貴の笑顔が目の前に!?

いや、これは笑顔というか……むしろ狂気すら孕んでいる。  
ナニコレ……ちよつと……その、私は、ただ、一緒に――

「かわいいよひなぎくー!!!」

「ぎゃ、ぎゃ……ぎゃ……ぎゃ……!?!」

大声はマズイ。近所の誰かが起き出してくるかもしれないから。

でも、でも……まさか……こんなところでおっ始める気!?

手を繋ぐとか、腕を組むとか、そういう次元じゃない。

両腕をしっかりと掴んで……グイグイと私に食い込んでくる。

そして――

ガッ!

踵に何か引つかかかって、私は仰向けに押し倒されてしまった。背中に敷き込んだ

短い草の感触から、ここが芝生の上だとわかる。

「かわいいよひなぎく……ひなぎく……っ！」

「ひえっ、え……ぎゃ……!!」

清貴ってこんなに重かったの？

それに、こんなに力強かったの？

グイッと土の上に押し付けられて……あ、ああ……そんなに激しく乳首を吸うな

っ！

でも、下手に叫んだりしたら大事おわごとになってしまう。

かといって……こんなところでなんて信じられない！

「ん、く、んん……♥」

ダメ……だったら……ダメ……なの……に……っ！

清貴のヤツ、収まるどころかいよいよ滾ってきた。私の足を無理矢理開かせて……

「あっ、ああん、ら、らあ……っ」

何よ！ 普段はこんな……乳首吸いながら、捏ね回しながら、さらにソコを掻き回すなんて……シタことなかったじゃない！ 手エ抜いてたの!?

「ハア、ハア……ひなぎく……ひなぎく……っ！」

止めて欲しいのに……コイツ……いつもよりもずつと……激しい……！



「ハア、ハア……こんなところで……ダメ……だったら……」

ダメなのに……

やめなさいよ……

こんなの……こんなの……

「はっ、はあ……ああ……」

いやっ、いやなの……こんな無理矢理犯されるなんて……

「誰か……来たら……」

「そしたら、雛菊が判るんでしょ？」

「う、でも——」

こんなに深く絡み合ったら、いざというとき逃げられない。

判るといつても、どのくらいの範囲か自分でも判らないんだから。

気弱になった私に……清貴のヤツは、強引に唇を奪ってくる。

これじゃ、誰か来ても伝えられないでしょ！

てか、キスしたのっていつぶりかしら。

初めてのときは私が誘導してやったくらいで……少なくとも、こんな乱暴に舌を吸

われたことはない。

「んむ、ふ、ん、むう……」

ああ……舌が……舌がグチャグチャ……

指もズブズブ挿入れられて……くっ、ん……ソコ……性感じちゃう……  
「はむ、はむう……むふう……ふみゆう……」

ダメなのに……

ダメだって言いたいの……

ああ……それすらも許されないなんて……

いよいよ調子づいた清貴は、ズリズリと自分の腰の位置を変える。

私の腿を掻き分けながら。

犯されちゃう。犯されちゃう

避妊もしてない、獣のような清貴に……無理矢理！

いつもなら、言わなくても自分からゴムを着け始めるような優男が！

着けるのが面倒くさい——とか、そんな理由じゃないわよね。

明確に、求めてるんだ。直に触れ合うことで得られる——快樂を！

清貴の先端が私のアソコに押し付けられる。

これから、膣内が根刮ぎ擦り付けられようとしている。

そんなの——絶対気持ちいい！

だけど。

さすがに、ね。

私たち、まだ学生だし。

清貴さえ、一緒に学校辞めて家庭を持つとう！　　って引っ張っていつてくれるのなら

……

まあ、私もとつとあの家からは出たいし？

元々大学は諦めてたし？

ついていってやってもいいんだけど……

でも、やっぱり……

うう。

これを言ったら、いくら清貴でも本当にやめてしまおう。

ここまで人のこと蹂躪しておいて、いまさら止められても……

だけど、清貴のことを考えたら、騙し討ちのようなことはできない。

仕方がないから、清貴のために——言ってやろう。

長い口付けを終え、ふたりして呼吸を挟んだところで——

「……悪いけど」

って、割り込もうとしてもこのケダモノは躊躇なくアソコを目指してくる。

でも……これでどうかしら？

「私、今日、危険日だから」

ヌルつとした表層は撫でられたものの、清貴がそれより先に侵食してくることはない。

そして、私の言葉の意味を問いかける。

「もしかして……赤ちゃん妊娠てきる日？」

清貴の表情は、どこか険しい。理性と欲望の間で揺れているのでしょうか。

だから、もうちよつと追い打ちをかけてみましょうか。

「妊娠てきちやうかも。貴方にその覚悟があつて？」

さあ、どうするの？

それでも私を犯す？

もしくは……退く？

逃げることなく足を開いたまま、私は彼の答えを待つけれど……何故かここで、清貴は不思議そうに首を傾げた。

「？ 覚悟を決めるのは雛菊じゃないの？ だって、出産うむのはキミなのだから」

それは……まあ、そうなのだけど。

「でも、子供ができたなら、もう死ぬまで放さないから。一生大事にしてもらうからね。貴方の人生、それでいいの？」

浮気は絶対許さないし、別れ話なんてもつてのほか。地獄の果てまでだって追いかけてやるんだから！

……という私の意気込みに対して、清貴は平然と答える。

「そんなこと——」

——当たり前じゃないか。

……へ？

上辺だけを取り繕ったようには見えない清々しい笑顔に……う、動悸が止まらない……！

そんな私に、清貴は思い描いていた未来を打ち明ける。

「子供がいなくなつて雛菊を放すつもりはないし、放さないよ。でも、子供を出産うことで、僕らの絆が強くなるのなら——」

「え、え……私で、いいの……？」

一度は止められた清貴のアソコが……

私の……膾<sup>な</sup>内<sup>か</sup>へ……

「うん、僕は、雛菊じゃなきや嫌なんだ」

ダ……ダメだつてば……さすがに……

だけど……もう……

私には……

拒む理由が……ない。

「あ、ああああ……ッ!？」

ナニ!? ナニが挿<sup>は</sup>入<sup>い</sup>ってきてるの!？」

プニプニと柔らかい先端に、ゴリゴリと硬いデコボコ。

というより……こんな太いモノ知らない!

硬くて、大きくて……え、え? こんな膾<sup>お</sup>奥<sup>く</sup>までグイグイと……!？」

ちよつと待って。こんなの……ゴムの有無<sup>あ</sup>だけじゃ説明できない。

普段より興奮してるつてもあるだろうけど……もはや別物!

って、こっちの気持ちも定まらないのに……

「それじゃ、いくよ、雛菊」

「ひえっ、え……」

ズンっ！

「んっ」

ズンっ！

「んふうっ！」

ズン、ズン、ズン、ズン……

な……何なのよ、コレ……！

膣奥おおくに……膣奥おおくに何度も当たる……!!

ダメ、ダメ、ダメ、ダメっ！ ソコは性感カシじすぎる！

そんなに性感カシたら……おかしくなっちゃう……  
♥

「凄いつ、いつもよりも締め付けてるよ……雛菊！」

それは貴方のモノが大きくなってからよ！ ……なんて反論などできようもない。

口から手の平を離したらとんでもない喘ぎ声が漏れてしまいそう。こんな場所で、それはマズイ。

だから、一生懸命塞いではいるけれど……もうこれ以上は……っ！

それどころか、清貴の愛撫にはいつもの優しさが無い。

ひたすら肉食で、私の胸を握り締めて……あっ、ダメ！ そんなに乳首をつねった  
ら……っ！

「ん、ん、ん……っ！」

ああ……おっぱいがゾワゾワする。清貴のこんな淫らな手つき、初めてかも。いままで抑えていたのか。遠慮していたのか。本当は、こんなに触りたかったのね。

アソコの腔奥おくも壊れてしまいそう。

このままじゃ、私……耐えられない……っ

「んっ、んんっ、んんっ、んんっ……っ！」

ダメ！ ダメ！ ホントもうダメ！

溢れてくるモノを留められない！

もっと欲しいのに、これ以上求めたら……絶頂トされる！

こんな……こんな男に……そんなの……悔しい……っ。

でも……



お願い、やめないで！

もつと強く！

もつと膣奥おくをゴリゴリして欲しいのお……っ ♡

「んんっ、んっ、んっ、ん、ん……！！」

抱き締める清貴の背中にすら、愛おしさを性感カ感じてしまう。

く……う……う……もう……ムリい……♡

ビクンっ！

「んんん~~~~~♡♡♡」

全力で清貴にしがみついて、私はお腹の内側から走る衝動に耐えている。だけど——

ビク、ビク、ビク、ビク……

まだ止まらない……こんな激しいの初めて……

だって……まだ清貴の勃起カタいモノが膣内なかにいるんだもの。

ヒクヒクする度に……それを強く性感カ感じてしまう……♡

清貴の腰が止まってる、ってことは……バレちゃったんでしょね。なのに、あえ

てそれを確認してくるなんて意地が悪い。

「雛菊……絶頂イッちゃった？」

演技だと思われたくもないし……正直に、喜ばせてやりましょ。

「たっ、誕生日プレゼントだからよ。嬉しい!？」

これまで、貴方は私を絶頂イカさせたことなんてなかったんだからね？

「うん、嬉しいよっ」

腔内なかでもピクピクと喜びを表現している。私もこれまでとは比べ物にならないくらい良かったし……少々無茶した甲斐はあったかもね。

と、一息ついたところで、清貴は変わらぬ笑顔のまま――

「でも」

？ 何か不満でも残ってるの？

「僕、まだ射精イッてないから」

………え？

ズンズンズンズンっ！

「ちよ、ちよ、ちよ……ここから先は……もう……っ！」

待って！ 何でこの男こんな元気なのよ!!

って、まだ射精イッてないからか！

「雛菊には赤ちゃんう出産うんで欲しいから……もう少しっ、つきあってね……っ」

「あっ、なっ、なっ、なにっ……っ♥」

ダメダメダメダメっ！ ホントにダメ！

さつきよりも敏感になってるのか、もっと強く性感カシじちやう！

乳首の指も……乱暴になってるかい？ そんな、絞るように……

「くあんっ、はっ、ああん、やあああんっ♥」

もう……声も我慢できない！

通報されて、人が来ても……絶対放してやらないんだから！

男のコの背中をグイと引き寄せるも……く、う、アソコからの衝撃が強すぎる……

っ

「ああっ、あ、あ、あ、はあ……らっ、らめ、らめ……ああああ……」

お願いっ、これ以上は強くしないで……

これ以上強くされたら……おかしくなっちゃっ……♥

おかしくなるのを止められない！

もっと、もっとおかしくなりたくなくなっちゃう！

誰が通るかも判らない公園で……お外で……こんなこと……こんなこと……

シて欲しくなっちゃう……っ♡♡♡

「僕、もう少しで、射精そうだから……頑張つて！」

やめる気ない！最後までやり通すつもりだ！

このまま、私の膣内で……精子を……

赤ちゃん、妊娠んじやう……清貴の……赤ちゃんを……

さすがに今度は、清貴も射精わよね。

避妊もしてない生のままです。

私の膣内から抜くこともなく。

喉でなら、受精止めたことはあつたけど。

ドロツとした熱いアレが……私の子宮に……

「はっ、ああっ、あ、あ……ああああん……っ♡」

想像しただけで性感じてしまう。

清貴の、清貴が……大きく性感じてしまう！

射精されちゃう！

射精されちゃ……妊娠しちゃダメなのに！

でも……ああっ、欲しい！ いっぱい欲しい！

いまなら判る。絶対、フェラとは比べ物にならないほど熱くて濃ゆい精液が、私の子宮をいっぱいにしちゃうんだ……♡

ダメなのに。

ダメだって言ってるのに。

こんな乱暴に振じ込まれて、

避妊もせずに膣内に射精されて、

妊娠させられて……

こんなに酷いことされてるのに……この男を抱かずにはいられない！

止めることなんてできようもない！

「らっ、あっ、はっ、やあっ！ 絶頂そうなの！ 絶頂ちゃうのっ！」

お願いっ！ もう……耐えられないから……

絶頂たいの！ 膣内に射精していいから……このまま……絶頂せて……！！

「射精よ、雛菊！」

「受精てっ！ 私の子宮に……受精てええええっ！」

ビュルルツ！

「あ、ああ……」

じわあ……

ビクン、ビクン、ビクン……

痙攣してても……わかるものはわかるのね……

清貴の精液が、私の子宮に広がっていく。

私……膣<sup>なか</sup>内で射精<sup>だ</sup>されちゃったんだ……

危険日なのに……本気で妊娠するかもしれないのに……

だけど——

「赤ちゃん……妊娠<sup>で</sup>きるといいね」  
う。

この男には後悔なんて微塵もない。

心から、私との間に家族を作ろうとしている。

それはそれで、嬉しいのだけど——

「もし妊娠できたら、どうする気？」

うちの親はいいけど、清貴の両親をどう説得するか。

学校でも騒ぎになるだろうし。

と、現実的な話を振ってみるも……

「名前はずっと前から決めててね、男の子だったら樹木の『樹』、女の子だったら菜の花の『菜』を入れたいなー、って」

「訊いてないわよ、そんなこと」

はあ……そういうとこぼっかり気が早いよね。それに『樹』だの『菜』だの……自然を彷彿とさせる漢字ばかり。まさか、この先もこんな危険な場所ばかりで私を妊娠はらませる気じゃないでしょうね？ 誰かに見られたら迷惑でしょ。

「だったら、私からは『礼』の一字を送るわ。礼節を弁えるように」  
皮肉のつもりだったのだけど、清貴は嬉しそうに目を細める。

「だったら、子供の名前は……『礼樹』か、『礼菜』……だね」

……トクン。

これまで、誰かの母親になるなんて考えもしなかったけれど。でも、いまハッキリと思い描いてしまった。

自分の腕の中に抱かれている——赤ん坊の姿を。

この子が、礼樹……もしくは……礼菜？

……う。

……嬉しい……

まさか、私の中にそんな感情が芽生えるなんて。

この心境の変化に自分自身戸惑っていたのだけど……じーっと焦がされるような熱視線を感じる。

もつとも、状況が状況だけに、その相手が彼以外では困るのだけど。

「雛菊……」

「な、なによ……」

お射<sup>だ</sup>精したばかりで少し落ち着いたと思っていたけど……ムク、ムク、と私の臍<sup>なか</sup>内で勃<sup>お</sup>起<sup>お</sup>きくなっていくのがわかる。

まさか……まだ……!?

「かわいいよひなぎくっ！」

「ぎゃああああああっ!!」



ま、ま、まさか……まだやるの!!

こっちは腰がガクガクで……逃げられないのに……!!

私の女体カラダが……どこまでも男に翻弄されていく。

犯されても、犯されても、どこまでも……っ!

「あ、雛菊の膣内なか、締まりだしたねっ」

「しっ、し……知らないわよ、そんなの!」

犯されちゃう。

また、こんな誰が来るかもわからない公園で……

男に押し倒されたまま……犯されちゃうんだ……♥

そして……

私は、お腹の温かさを思い出す。

アレが、また射精くるのね。

次で収まるのか、さらに犯されるのか——それは誰にもわからない。

だけど……

底なしの肉欲を前に、私の子宮おなかがヒクリと疼いた。

露出少女と痴女の  
モラルなき戦い!

# 裸族忍者シリーズ

いつでもどこでも脱ぎたがる  
露出少女・埋竹礼菜  
大好きな男と子供を成すことに  
人生を懸けて迫ってくる痴女・鷹池。  
そんな三人に翻弄され続ける  
流され男子の痴情まみれの官能ライトノベル!



詳しくはWebで

<http://soekiba.net/ninja/>

いじめ  
られっ子の  
処方箋

正義の投与の  
行く末は

イジメの起きない  
イジメ小説!?

イジメ撲滅運動——  
とある高校で突如始まったこの騒動に  
埋竹雛菊は意図せず巻き込まれていく。  
しかし……

そもそも、イジメとは何なのか？  
そんな疑問に突き当たる。  
悩み抜いた末に、辿り着いた結論とは……？  
そして、運動を取り仕切る  
学級委員・雨弓来未の真の目的とは……？  
イジメと向き合うすべての人に送る一冊です。

コミカライズ版 総集編第1巻も  
各配信サイト様より公開中

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/presc/>



アストラルツインズ 2

アストラルツインズ

テロリスト 反逆者  
プリンセス 民間人  
そして... アホの子  
掻き乱す問題児!

兄は指揮官に妹は銃殺刑に

DOJIN R18 成人向け 18歳未満の購入・閲覧禁止

うらアストラ!?

妹はお風呂嫌いで  
王女は珈琲が大好き  
アストラルツインズ  
後日談的R-18短編集!

詳しくはWebで  
<http://soekiba.net/astra/>

DOJIN  
R18  
成人向け  
18歳未満の  
購入・閲覧禁止

# セイ イヤ アム ズ ラビット ト

うせぎせんとうらこつよ

ついに訪れた  
家族の離散——  
生きる道を失い  
故郷である兎ヶ島へと  
帰ってきた里倉和兔。  
しかし、そこは——  
老若男女問わず誰もが発情し、  
異性を求める色情の地と化していた！  
裸の女の子たちに迫られて、  
最初は戸惑う和兔だったが、  
次第に住民たちの勢いに  
流されてゆく。  
しかし——

食べて 寝て

交尾する！

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/sar/>



sorega kanojo no

# それが彼女の

## 未知なる世界で どう生き延びる...?

# 生存戦略!

seizon senryaku

オトナ向けの  
番外編的短編集  
『それが彼女の  
性交戦略!』も  
こっそり公開中!?

学校が異世界に飛ばされた!?  
それでも見知らぬ大地の上で  
誰もが遅く生き延びてゆく。  
ある者は『力』で、  
ある者は『智』で、  
ある者は『心』で、  
ある者は『愛』で。  
そして……  
彼女たちは元の日常に  
帰ることができるのだろうか……!?

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/4girls/>

オンナ  
たぎる♀に

おびえる♂  
オトコ

乳を出そうが、尻を出そうが、  
女の身体は贅肉扱い。  
一方、成人向けコーナーには  
半裸の男優ポルノがズラリ——  
女が迫り、男があしらう、  
そんな世界があったとしたら……？  
価値観・身体づくり・社会システムに至るまで  
真面目に考えてみた物語です。

リビド〜  
男女の性衝動が反転した社会とは  
リバ〜サル

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/rev/>

# 僕と私の 露出日記

The diary of Sleeping under the stars for Ours

自然の中で育ち、  
裸で野山を駆け回るのが  
好きな少年。  
非日常を求めて裸になり、  
その快感に  
目覚めてしまった少女。  
孤独に背德的性欲を  
膨らませてゆく二人だったが、  
ついに――

立派に  
育った  
露出癖

わたしとあなたの  
露出交換日記

スピンオフでも  
野外で全裸！

野外で裸に  
なりたい男と  
他人の痴態を  
覗きたい女。  
出逢ってはならない三人が  
出逢ってしまい――

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/outdoor/>





# 空色書房

Sleeping under the sky

私の彼氏は露出狂——

さいわいゆめ

埋竹雛菊は恋人の悪癖に嫌気が差しながらも、  
そのとき垣間見える男らしさにどうしても惹かれてしまう。

公園で、教室で、挙げ句の果てには全裸下校…!?

だが、そんな彼に振り回されていくうちに、  
雛菊は自分の中に潜んでいた危険な欲望に気づき始める——

